ポスターNo.B6　　実践発表

オンライン WS 研修「子どもの日本語学習デザイン」の仕掛けと成果
―「協働で学ぶトピック／タスク型学習」の設計をテーマに―

齋藤ひろみ・谷啓子（東京学芸大学）

１．実践の目標

多様な言語的文化的背景をもつ子どもの増加に伴い、学校教員及び学校で日本語教育に携わる講師・指導員、母語支援者を対象とした、外国人児童生徒教育・日本語教育に関する研修の必要性は高まっている。しかし、 文部科学省（2026）によれば、教育委員会が独自に研修を実施している地方公共団体は、21.1％に過ぎない（1,788 団体中 378 団体）。また、実施しない理由には「日本語指導対象の児童生徒がいない」の他、「受け入れが不定期で計画的に研修を実施できない」「研修担当講師の確保が困難」「実施すべき研修内容がわからない」などが挙げられ、研修の必要性を認識しつつも実施できていない現実が浮かび上がる。さらに研修実施回数（中央値は２回）からは、日本語教育の実践的力を養成するには研修の機会･内容とも不十分であることが推測される。

発表者らは、こうした状況に対し、教員養成系大学として、日本語指導担当教員、および教育委員会などの派遣による日本語指導者・母語支援者等を対象に、広く全国のどの地域からも参加可能なオンラインで研修機会を提供することを念頭に、本研修を実施してきた。2023 年度より年3～５回のオンライン研修を行ったが、主に関連情報の提供を中心とする構成とした。しかし、参加者アンケートでは、「現場の実践事例」「授業の設計」「実践の具体的方法」が高評価であり、実践力強化へのニーズが表れていた。そこで、本年度は、「子どもの多様性が活きることばの教育：日本語学習をデザインする」をテーマに、ワークショップ型の研修に変更した。研修の目標は、「多様性」「問題解決力」「協働」を意識したトピック型・タスク型の日本語の学習デザインを理解し、自身の言語教育活動に活かすことである。なお、発表者らは所属機関のプロジェクトとして、両タイプの活動案の開発を進めており、研修では開発者が活動案の紹介を行った。

本発表では、本研修のオンラインによるワークショップ型研修（以下 WS）としての仕掛けと、実施状況、参加者の研修参加状況、アンケート結果からその成果について分析し、報告する。

２．研修の概要

（１）研修参加者の背景―全 3 回のアンケート 240 件より（回収率 67％）

研修参加者は 3 回で計 357 名であった。その立場は学校教諭 26％、講師 21％、日本語指導員 27％、地域支援者 13％、その他 13％である。その約 70％が日本語指導、10％が教科指導、10％がコーディネートを行っている。日本語指導経験は、1 年目が 13％、2～３年が 21％、4 年以上が 60％であった。学校で一定期間、日本語指導を行ってきた者が、日本語教育の実践方法として、トピック型・タスク型の学習デザインに関心をもって参加したものと推察される。

（２）研修テーマと WS の内容構成・仕掛け

第１回「テーマ：日本語プログラムと活動をデザインする」では、２タイプの日本語学習活動「トピック型」と「タスク型」に関し、考え方と活動案例を示し、WS でいずれかのタイプの学習活動を構想した。第２回を「学習活動をデザインする①―トピックをめぐる言語活動」、第３回を「学習活動をデザインする②―課題達成のための言語活動（タスク活動）」とし、それぞれ「ト

ピック型」、「タスク型」の考え方とデザインに関する講義の後、WS として対象児童生徒を想定して言語活動を設計した。設計した活動案はグループ間で共有し、全体で振り返った。

オンラインによるＷＳ実施の仕掛けとして、①開発者による活動案の例示、②活動案書式に設計の手続き（目標設定、トピック・タスク選定、探究的・協働的活動の配置等）とその必要性を明記、③グループ活動のプロセスと成果をオンライン上で共有、④各グループにファシリテータを配置、⑤2 グループ間の成果物（活動案）の紹介、⑥「多様性」「問題解決力／探究活動」「協働」の視点に照らした成果物（活動案）の振り返りを行った。

３．研修参加者の学びーアンケートより

アンケートでは、各回とも「講義」「開発者による実践例」「グループワーク」の活動に関し、9 割以上が「参考になった」との回答であった。その一部を紹介する（以下、自由記述より抜粋）。

・全体理解のための講義から始まり、グループ活動では具体的な取り組みに落とし込めた。
・学習活動案を短時間でも 5 人＋アドバイザーと取り組むことで、具体的に作れると感じた。
・参考になった点は、課題解決のための活動を軸に組み立てること。
・トピックをめぐる学習活動になかなか取り組めなかったが、自分で作成する自信が持てた。
・その子にとって意味のある活動の意味が、「日直の仕事」等のトピック化の例で納得した。
・他の自治体等で活動する先生方と意見交換でき、学びにつながった。

以上のように、研修の内容構成・WS 活動の工夫、トピック型の学習デザインへの理解と今後の取り組みへの積極性、他の地域・立場の人との協働による学びについて語られている。

会場での発表では、アンケート結果に加え、WS の成果物（活動案）とその設計プロセスにおける参加者間の学び合いの姿を具体的に示した上で、次の本研修の成果・課題を整理して報告する。

４．本研修の成果と課題

WS の仕掛けとして配置した活動案の例示は、その開発者によって行われたが、各要素の設計意図が対象児童生徒の実態に関連付けて語られ、参加者の理解が促された。活動案作成の話し合いで互いの経験や考えに触れ、例示された活動案に立ち戻り、書式の詳細な説明から、学習デザインに関して学び合う様子があった。また、アンケートの自由記述にも見られるが、成果物（活動案）からも、多様性を考慮し現実的課題を学習の中心に据えてトピック型・タスク型の活動を構成し、日本語運用の具体化をプロセスとしてデザインする重要性への気づきが読み取れる。

一方、先述のように、参加者の日本語教育に関する経験の長さや立場により、事前の知識や子どもとの関わり方の違いは大きい。それは学習デザインの理解の度合い、活動案設計のスキルの違いとして、WS の作業過程にも表れていた。例えば、Can-do の考え方に基づく目標設定に難しさを感じ、作業が停滞する場面や、子どもの実態に合わない活動や言語事項が提案される場面もあった。今後は、参加者の専門性や経験を考慮し、経験・専門性の異なる者が学び合える WS が求められるが、参加者の背景が募集後に明らかになるタイプの本研修で、参加者一人ひとりに意味のある学びの場を構築するには、WS 自体のデザインの他、多面的な検討が必要であろう。

【引用文献】

文部科学省（2026）「令和７年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」https://www.mext.go.jp/content/20260525-mxt_kyokoku-000049811_03.pdf